



Profile — 村山正治

1934年生まれ。1963年、京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得後退学。九州大学、久留米大学、東亜大学で教授を歴任。専門は臨床心理学。著書は『ロジャースをめぐる』(金剛出版)、『新しい事例検討法 PCAGIP 入門』、『現場で役立つスクールカウンセリングの実際』(いずれも共編、創元社)など。

私はロジャースのいた米国カリフォルニア州サンディエゴにあった Center for the Studies of the Person (CSP) に 1972 年 4 月～1973 年 3 月まで客員研究員として滞在した。当時ロジャースは、エンカウンター・グループ (EG) をツールとした世界平和プロジェクトに邁進している時期だった。ロジャースの最晩年に接触したことをまず明確にしておきたい。またアメリカ心理学会から職業貢献賞と科学貢献賞の両賞を受賞しているただ一人の心理学者であること、1987 年のノーベル平和賞の候補になったことも明記しておきたい。

はじめのはっきりした人 私が渡米して初めて CSP に出勤した時、マリア・ボウエンと二人で、正装して出迎えてくれたことに感激した。以後ロジャースの正装姿を私は見たことがない。また、帰国のパーティを拙宅で開いた時、CSP のスタッフを大勢連れてきてくれたことも印象に残っている。ベトナム人の心理学者が博士号を取得した時も、ロジャース宅

ロジャースの思い出

— カウンセリングから世界平和プロジェクトへ

九州大学 名誉教授

村山正治 (むらやま しょうじ)

でパーティを開いていたことも思い出す。私達を、人を大切にしてくれた感じが強く残っている。世界中を動きまわっていた多忙のロジャースの心遣いがありがたかった。

傍に居るだけのロジャース これも渡米間もない頃、CSP のスタッフの家でパーティがあった。庭の芝生でビールを飲みながらの談笑がご馳走の会である。青天の中そよ風に吹かれ、二時間位立って疲れてきて、妻と日本語で喋りはじめていた。疲労感と孤独感もあった。ふと気がつくと、ロジャースが、缶ビールを片手に私達のところに来ていた。これは話しかけるでもなく、私達の会話に耳を傾けていただけだった。ロジャースの来日講演の折、「アリガト」とごちない日本語を一度だけ聞いた記憶があるので、その時日本語は理解していなかったと思う。ただの人としてそこにいてくれるロジャースの存在感は私達に安心感を与えてくれた。

共感力抜群 ある時「相談がある」と呼ばれて、CSP でロジャースと話し合ったことがある。Person-Centered Review 誌を發刊するので、日本から編集委員を推薦してほしいとのことだった。数名、日本人の名前を挙げた時、ロジャースは柘植明子さんの名前を挙げた。さらに数人挙げたところで、ロジャースは「君もね」と言って私を推薦した。この時私は、自分の名前を挙げようかどうか迷っていたのである。すかさず「君もね」と入ってきたのには、ありがたさと、彼の理解力に感嘆した。

著名なグループ実践家である日本人夫妻が CSP にロジャースを訪ねてきた時も、私が呼ばれて同席した。話の内容は忘れてしまったが、夫人の質問に何かロジャースが応えると、彼女は身を乗り出して、ロジャースに抱きついたほどであった。彼は微妙な人の気持ちをよく理解できる人であった。

地球人ロジャース ロジャースはアメリカ人というより国際人であった。しかし、英語以外の語学が堪能ともきかない。CSP には世界中から人が訪ねてくる。当時、平和プロジェクトも世界的な広がりを見せていた。世界平和に EG の原理を生かし、解決ではなく、人間としての相互理解を促進する方法を採ることなどである。音楽が世界共通に人類の心に響き、働きかけるように、これは、人類共通の人間の感情、気持ちに働きかけて、相互理解を形成するアプローチといえよう。

生のデータに接触する大切さ ロサンゼルスのある大学で行われた EG のプロジェクトが CSP 仲間でも「失敗だった」と言われていた。私も帰国して EG をやる気だったのでロジャースに聞いてみた。彼は「関心があるなら、紹介するから現地で聞いておいで」と言い、アドレスを教えてもらった。責任者に聞くと、変化が起っていたがやめた教員が多く出たなどの事実を知り、私には失敗か成功かはよく判断できなかった。しかし私が学んだことは、成功失敗にとらわれず、事実をよく見たり感じたりすることの大切さであった。